御正月特番「カオス色シンフォニー」

アヴェンジャー@見よ、駄作者は紅く燃えているゥッ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御正月特番「カオス色シンフォニー」

【Ｎコード】

Ｎ９７３５Ｚ

【作者名】

アヴェンジャー@見よ、駄作者は紅く燃えているゥッ！

【あらすじ】

大晦日特番「Ｎａｒｏｕ／Ｚｅｒｏ」に続くカオス。

膨大な人数の出演者が織り成す作品を御覧あれ！

ｅｐ１：「勇者ルナマリアと魔王（ドＳ）の城」（前書き）

最初に謝罪を。

完成が間に合わず連載形式になり、本当に申し訳ありません！

もしかしたら完成が遅れるかもしれませんが、その場合は御容赦下さい。

それでは、お楽しみ下さい！

ep1：「勇者ルナマリアと魔王（ドS）の城」

大晦日（ぜんかい）特番までの粗筋――――

学生なのに師走に走った罪で投獄された少年まさる。しかし自身の野望を捨てなかった彼は猛烈なダッシュからの体当たりで牢の壁を破壊、再び爆走の限りを尽くす。そんな彼をスカウトせんと動いた秘密結社『二日目の軽井沢』は――――

メイリン「（素敵笑顔で）駄作製造機、撲殺されるのと埋められるのとどっちが良い？」

ミッドチルダ第3スタジオ――――

ルナマリア&メイリン「明けましておめでとうございます！」

ラクス「明けましておめでとうございます」

エルデ「明けましておめでとー、だ」

ラクス「来ましたわね、新年」

ルナマリア「そうですね。モノアイ元年の到来です」

メイリン「いや、そんな元年無いから！」

ルナマリア「A○Eに代わって機動戦士ザクを放送する時が遂に来たのよ！」

エルデ「誰得なんだそれは……」

ルナマリア「勿論私得です！（キッパリ）」

ザックス「正直過ぎるだろ……」

心愛「その正直さは尊敬に値しますね……。と、言う訳で」

白「何が『と、言う訳で』なのですか！　何がどうなっても、白は心愛しゃんとは籍を入れないのです！」

心愛「そんな……私の何がいけないんですか！」

白「同性と言う時点でアウトなのです！！！」

ノア「何か盛り上がってますね、マスター」

クロス「盛り上がってるって言うのかな、アレ……」

コルト「まあ……良いんじゃないかな」

ブルズ「取り敢えず、深くは追及しないでおこう。あっちにもあっちの事情があるんだろうし」

ラクス「新年と言えばエルデさん、お年玉を下さい（手を出しながら）」

エルデ「何をいきなり言ってるんだお前は……。寧ろお前は部下にお年玉をやらねばならん立場だろーが」

ラクス「『減るのは嫌』と『人の物は私の物、私の物は私の物』。この2つは我々の業界では基本ですわ」

リオス「ぶっちゃけた！　言っちゃいけない人が言っちゃいけない事をぶっちゃけたよ！」

クラウド「最早原形を留めていないな……いや、後の方のジャイアニズムはある意味留めているのか？」

ケイ「って言うか、何の業界なんだよ……」

ルチア「でも、何だか分かる気がします。特にお金はすぐ減りますから」

シュウ「ルチア！？　ダメだからね！　その思想を理解したら真っ当な生き方からどんどん外れるからね！」

ソフィア「お年玉かあ……八神部隊長から貰えないかなぁ」

エルト「年を考えろ年を。貰えてエリオやキャロが限界だろう」

リオス「いや、はやての事だから貰えると思うよ。おとしだまは」

レーネ「は？　……ああ、成程。『そういう事』ね……」

ソフィア「何何？　貰えるの？」

リオス「うん……。まあ、ね……」

セレーネ「マスター、私もオトシダマが欲しいです♪」

ヴィレイサー「分かった分かった。後でやるから」

セレーネ「わーい♪」

エルデ「お年玉談義で盛り上がってる所に水を差す様だが、そろそろ大晦日のクイズの続きと行くぞー」

（大型モニターにタイトルが表示される）

ラクス「亜留帝滅斗（アルティメット）・苦威頭（クイズ）　新年バージョン『本物はどっち？Ｈｅｌｌ　ｏｒ　Ｈｅａｖｅｎ』」

瑠樹「相変わらず物騒なタイトルだな……」

タクヤ「オイ、もしかしてまた戦場送りなんてのじゃねぇだろうな？」

エルデ「安心しろー、そんなに戦場にばかり送り込んでる程資金的な余裕は無い。何より視聴者も私も飽きるだろー？」

怜「何か間違った感じの台詞だけど、取り敢えずツッコミはスルーしておくわ。大晦日の事を考えると、ツッコミ疲れって事が有り得そうだし」

メイリン「それではルールを説明しますね。今から皆さんにはチームを組んで貰います。その上で……（モニターを展開）」

（空中に現れた巨大モニターに、別の部屋が映る）

メイリン「組んだメンバーの中から2人を選んで、あちらの部屋に行って下さい。その2人の前に良く似た2つの物を出しますから、こちらが提示する条件に合致する方を選んで下さい」

ユウ「ややこしいなオイ」

ラクス「まあ早い話が『○気者で行こう！』とか『○村&所の戦○お正月』みたいな感じですわ。私は後者は観た事が無いのですが」

哲「成程。じゃあ不正解を出したヤツのチームには何かしらのペナルティーがあるって事か」

エルデ「あー、そーだ。こんな風に、なー（指を弾く）」

ルナマリア「ぎにゃあああああッ！！！！！（大爆発に巻き込まれる）」

ザラック＜火力が高過ぎるだろう！　不正解＝死ではないか！＞

エルデ「済まん、加減を間違えた。この位だ（指を弾く）」

ルナマリア「ぼべらあああああッ！！！（赤い爆発に巻き込まれる）」

ヒナギク「色を変えてどうするんですか！　火力を落として下さい！」

エルデ「こーじゃなかった、こーか（指を弾く）？　いや待て、こーだったか（指を弾く）？　いや違った、こーか（両手の指をｒｙ）」

ルナマリア「びぶっ！　ふみゃあ！　ぼんばあああああッ！！！（青・黄・緑・桃の爆発にｒｙ））」

ヴィレイサー「エルデ、お前絶対わざとやってるだろ……」

エルデ「やはりバレたかー。途中から楽しくなってなー」

竜哉「ほう、中々面白そうだ」

エルデ「お、参加するのかー？」

竜哉「ああ。そこの２人を相手に少しやらせろ（ホーク姉妹を指差して）」

ルナマリア「はい～ッ！？」

メイリン「ちょっ、ちょっと待って下さい！　私はそういうポジションじゃ……」

竜哉「それ（指を弾く）」

ルナマリア「ザクッ！（洗面器が頭に落ちて来る）」

メイリン「あうっ！（洗面器が頭に落ちて来る）」

竜哉「そら（指を弾く）」

ルナマリア「グフッ！（小さいタライが頭に落ちて来る）」

メイリン「へ……？（クッションが頭に落ちて来る）」

竜哉「ほらよ（指を弾く）」

ルナマリア「ドムッ！（金のフリーダムの像が頭に落ちて来る）」

メイリン「わぁ……トトロの縫いぐるみ♪」

エルデ「おー（拍手）」

（スタジオ中から拍手）

ルナマリア「ちょっと待てぇー！！！　何で私がフリーダムの像で、メイリンがトトロなのよ！　こんなの不公平じゃない！」

エルデ&竜哉「「え？」」

エルデ「え？　いやだって……」

竜哉「なぁ……」

エルデ「ハッキリ言って」

竜哉「この方が面白いし……」

竜哉・エルデ「弄りがい（調教のし甲斐）があるだろー？（あるじゃん）」

ルナマリア「ムキィーーーー！」

ザックス「何か今、さらっと竜哉が危険なワードを発した気が……」

翔「あー、アイツこういう悪ノリが大好きだからなー。でもって人を弄くって調教したりとか……」

竜哉「さて、究極の選択デス♪　このままインゴットのガンダム像を脳天に落とされ続けるか、爆発が良いか？　さあどっち？　Ｄｉｅ　ｏｒ　Ｄｅａｔｈ？　Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｙｅｓ？」

ルナマリア「拒否権が無い！？」

竜哉「良い反応だ。ますます調教のし甲斐があるねー♪　さあ、豚の様な悲鳴を上げろ！」

エルデ「よーし、私も混ぜろー。この世全てのＳの絶技をお前の身の快楽にしてやるぞー♪」

ルナマリア「そんな快楽要らないですって！　ちょっ、何あの『ごーもん部屋』って部屋は！　行きたくない行きたくない行きたくない！　何でもするからこの拘束を解いてええええッ！！！！！」

（ルナマリアが連れて行かれる）

クロス「うわぁ……（ドン引き）」

クラウド「鎖鎌の鎖をああ使って敵を捕まえるのか……本編で戦う時には要注意だな」

リオス「いや、冷静に分析してる場合じゃないでしょ！　早く止めなきゃ！」

ヴィレイサー「止めとけ。ああなったエルデを止めると不機嫌になって逆にこっちが危ない。アイツを生贄に少し発散させた方が安全だ」

白「ドS星の皇帝と女帝なのです！　フラメしゃんよりはまともだと思ったのに！」

泰子「まるで浜〇雅〇だな。司会に回すのが正直恐ろしい……」

リオス「誰！？　そんな危険人物を司会に抜擢したのは！」

ラクス「アヴェンジャーですわ。私達に少しウザった……基ハイテンション気味に告げて来ましたの」

メイリン「気持ち悪かったから2人で無反動砲で吹き飛ばしましたけどね」

ラクス「ねー」

リオス「あの人が犯人か！　って言うか2人共何してるのさ！」

綾人「済まん、ちょっとリオに電話させてくれ。遺言を伝えないと」

ルナマリア（アヤナミ状態）「み、ミカンの白い筋はちゃんと取って食べて下さい……。後、衣替え検定の証明書の譲渡先は士官学校で同期だったオカダとマスダに……」

メイリン「何それ」

ラクス「皆さん準備に余念がありませんわね。良い心掛けですわ（頷きながら）」

エルト「ラクス、この番組が終わったら君やアヴェンジャーを含めたスタッフ一同に局まで来て貰いたいんだが……」

泰子「（ひそひそ声で）待ってくれエルト。エルデやフラメは兎も角、君達が言う所の管理外世界の人間であるラクス達やアヴェンジャーを局の法で裁くのは問題があるだろう。ココは警察として私が彼らを担当するから、君達はエルデやフラメの方を捕まえてくれ」

泰子（そして捕まえると同時に“彼”に頼んでアヴェンジャーを……フッ、完璧だ）

エルト「ふむ、それもそうか。ラクス、構わないか？」

ラクス「ええ。構いませんわ」

ラクス（御二方共甘いですわね。私がこう言った事態に対し何の備えもしていないとでも？　黒を白に、白を黒にする監督夫妻の力を見せて差し上げますわ）

ファイム「今物凄くドス黒い思念を感じたんですけど。御子様には見せられない邪悪な駆け引きの臭いがしたんですけど」

メイリン「え～と……ではそろそろチーム分けに入って下さい。あまり時間を掛け過ぎてぐだぐだになるのも問題ですし」

翔「そ、そうだな……」

２０分後――――

ルナマリア「え～と……皆、決まったー？　決まったらそのメンバーで集まってねー」

クロス「いや、決まったけどさ……ルナ」

ルナマリア「ん？　何？」

リオス「何で拷問される前より肌の色艶が良いの」

ルナマリア「フッ……、禁則事項よ（ドヤァ」

エルト「クロスにリオス、アイツには構うな。疲れが増すだけだから」

リオス「そうだったね、ゴメン……」

ケイ「シュウさん……ココに人間サイズのビームサーベルがあるんですけど、あの人斬っても良いですかね？」

シュウ「止めとこう。斬ったら分裂して2人になりかねないし」

ケイ「ですね……」

メイリン「本当に済みません、後でそれ使って三段突き・峰打ちの刑に処しておきますので」

タクヤ「いや、突いてる時点で峰打ちじゃねぇだろ。思いっ切り絶命狙いだろ」

メイリン「大丈夫です。ウチの姉は心臓さえあれば蘇れますから」

ノア「普通に人間止めてますね……」

竜哉「スカリエッティが知ったら解剖したがるな……」

エルデ「コレが人間の進化と言うヤツだ。それより決まったメンバーで早く集まれー」

（ざわざわ）

ラクス「それでは皆さん、第一問を発表しますわね。メイリンさん」

メイリン「はい！　第一問は……こちらです！」

（モニターに『絵』と描かれる）

ラクス「第一問の課題は『どちらがプロの描いた絵か』を当てる事です」

エルデ「まー、素人とそれで食事しているヤツの描いた絵だ。違いは見抜けて当然、だと思うがなー」

ブルズ「いきなり難問だな……」

コルト「まあ……分からない事も無い、とは思うけど難しいよね」

セロ「絵か……発掘品なら簡単だったかもしれないけど……」

エルデ「因みに今回、素人サイドで絵を描いたのは……」

ルナマリア「はいはーい♪私が描きましたー♪」

ゲスト全員「あ、こりゃ楽勝だ」

（ルナマリアが派手にずっこける）

ルナマリア「ちょっ、いきなり皆失礼でしょ！　私だって絵位描けるわよ！」

リオス「いや……だってさぁ……」

ザックス「ルナじゃあなぁ……」

セレーネ「今までのデータの蓄積とかを考えたら、当たり前の反応ですよねぇ……」

綾人「だな。こう言っちゃなんだけど、何か下手っぽいし」

哲「俺も同意見だな。悪いけど一発で見破れそうだ」

ルナマリア「ズガーン！　傷付いた！　私のピュアハートに傷が付いた！」

白「自分でズガーンとかピュアハートって言う人を初めて見たのです」

心愛「今のは録音しておきました。新年会のネタ提供感謝します」

ルナマリア「フ、フフフ……。そうまで言うんなら、ペナルティー

を追加しても問題無いわよね」

エルデ「それは名案だなー。良し、その案を採用するぞー」

翔「ちょっと待て！　アレに加えてペナルティーが付くのかよ！？」

ルナマリア「ええ。本来失敗した人はさっきの爆発だけで済ませる予定だったけど、それに加えてココや休憩中の待遇も悪くさせて貰うわ」

ヒナギク「今もそんなに良くない気がしますけど……」

ラクス「私は最後に持って来たかったのですが……まあ緊張感を持って頂く意味では良いかもしれませんわね」

怜「アンタ何余計な事言ってんのよおおおッ！！！」

哲「いでででで！！！　だって本当の事だろおおおおおッ！！！！！」

レーネ「どうしてくれんのよおおおおッ！！！！！」

綾人「いてててて！！！」

リオス「お、落ち着いてレーネ！　よーく見れば良いだけだよ！」

ヴィレイサー「男の娘の言う通りだ。ペナルティーが追加されたってだけだろ？　要するにプロの書いた方を言い当てれば何の問題も無い。そうだろ、エルデ？」

エルデ「そーいう事だ。簡単な話だろー？」

リオス「何か今失礼な単語が混じってたんですけど。今のは怒って良かったかなと思うんですけど」

コルト「お、落ち着いて。リオスさんを悪く言う心算で言った台詞じゃないんだしさ」

ルナマリア「そんなに簡単だと思うのなら、今から当ててみてよ。間違ってたら酷い目に遭うわよ」

ヴィレイサー「問題無い。外す気は元から無いからな」

チームA――――

ザックス「……って訳だけどさ、誰と誰が行く？」

タクヤ「絵に詳しいヤツがいりゃあ問題無かったが、そんなヤツはいねぇしな」

レーネ「クラウド、アンタ絵には……」

クラウド「……興味無いな」

レーネ「……アンタに聞いたアタシが馬鹿だったわ……」

エルト「いや、絵に詳しい必要は無い」

ファイム「？　どういう事ですか？」

エルト「さっきヴィレイサーが言っていた事と似ているが、素人の

やる事には注意深く見れば絶対に粗がある。……プロならまず無い粗がね。まして絵を描き慣れていないルナマリアの事、どんな絵を描いてもミスはあるハズだからな」

レーネ「確かに……」

エルト「まあ唯一の懸念材料として絵の題材が“アレ”の可能性もある訳だが……兎も角、僕達は落ち着いて対処すれば良いだけだ」

リオス「なら、特に注意深い人が行くべきだね」

ソフィア「なら、エルトとファイムが適役じゃない？　２人とも戦う時は頭脳的に行く事になる訳だし」

エルト「……そうでも無いと思うがな……。まあ言い出したのは僕だ。確り片は付けるさ」

ファイム「僕も頑張って来ます。あの制裁は流石に堪えるでしょうしね」

リオス「頑張ってね！　応援してるよ！」

チームB――――

クロス「絵かぁ……」

コルト「皆あんな事言ってたけど、区別するって結構難しいよね」

ノア「ですよねぇ……。アマチュアでも上手い人は上手いですし、プロでも下手な人は下手ですから」

ブルズ「某○のも○たが司会をしてた番組みたいにテレフォンがあればなぁ……」

ケイ「いや、誰に聞くんですか誰に」

ルチア「みの○ん○？」

レイトス「取り敢えず○のから頭を離せ。あのマダムキラーの濃ゆい顔がチラついて吹き出しそうになるから」

シュウ「じゃあ高田……」

ケイ「そう来たかぁー。取り敢えず話を戻しましょう」

ルチア「『減るのは嫌』と『人の物は私の物、私の物は私の物』。この2つは我々の……」

ケイ「戻し過ぎだから！　どれだけ古の話してるんだよ！」

レイトス「そこの天然は放っておくとして、誰が行く？　誰もいないなら俺が行くが……」

ケイ「いや、レイトスさんは後の切り札って事でお願いします。ココは俺が行きますよ。あの人は自信を持ってるみたいですけど、俺がそれを粉々に砕いてやります」

レイトス「分かった。だが、くれぐれも油断はするなよ」

ケイ「はい！」

ブルズ「なあレイトス。この問題、俺が行っても良いか？」

レイトス「勿論ですよ。只、気を付けて下さいね。正直な話、嫌な予感が止まないので」

ブルズ「ああ、分かってる。用心はしておくよ」

（２人が問題を出す部屋へと向かう）

レイトス「クロスさん、コルトさん。ちょっとお願いしたい事があるので耳を貸して頂けませんか？」

クロス「ん？　何？」

レイトス「あそこのＭＣ達には聞かれたくない事なので……（ひそひそ）」

コルト「……成程、分かった。任せてよ」

チームΓ――――

怜「また厄介な事になったわね……」

綾人「あのペナルティはシャレにならないな……。全く誰のせいなんだ……」

デミル「一から十まで１００％、徹頭徹尾まるっと完璧アナタのせいでしょう！　いや、他の数人にも責任はあるけど！」

ヴィレイサー「言っても仕方無いだろ。当ててしまえば何の問題も

無い」

哲「お前、簡単に言うなぁ……」

ヴィレイサー「それ位余裕を持ってないと、俺が怒られるんでね」

セレーネ「エルデさんはマスターに厳し過ぎるんですよ。只でさえマスターはどっかのツンデレさんの八つ当たりに苦労してるのに……」

ヴィレイサー「アイツが厳しいのは、俺の為を思ってくれているからだ。決して嫌がらせじゃないさ」

セレーネ「むぅ……」

ザラック＜惚気はさておき、当てる方に関しては誰が行ってもさしたる違いは無かろうな。皆絵になど大した関心も知識も持ってはいないのだから＞

瑠樹「まぁ、嫌いって訳じゃないけどな。それで、誰が行く？」

綾人「なら俺が言って来る。こうなった責任を取って……って訳じゃないけど、少しは役に立たないとな」

哲「なら俺も行く。ココらでそろそろ本気を見せてやるぜ！」

怜「哲、頑張んなさいよ！　失敗したら酷いんだからね！」

哲「分かってるって。俺に任せろ」

セロ「綾人、気をつけなよ」

綾人「モチのロンだ」

セロ「また古い台詞だな……」

チームΔ――――

白「絶体絶命のピンチなのです！　Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ｄｅａｄなのです！」

心愛「大丈夫です白さん。白さんは死なない……私が守るから」

白「心愛しゃん……」

心愛「だからこの婚姻届（あいのあかし）にサインを」

白「結局そんなオチなのですか！　随分懐かしい台詞が入った時点で何と無くおかしいと思ったら！」

泰子「あっちの夫婦漫才はスルーするとして、こっちは誰が出る？」

ヒナギク「なら私が。かなり厄介そうですけど、やってやれない事も無さそうですし」

竜哉「俺も出る。あの赤アホ毛の鼻を明かしてもっと弄って（調教して）やりたいしな」

白「今何か幻聴がしたのです」

翔「いや、それ幻聴じゃねぇから。竜哉の本音が駄々漏れしただけ

だから」

シキ「言い得て妙、だな。しかし彼女……エルデの制裁とやらは、随分と厄介だな」

泰子「どういう事だ？」

シキ「（頭上を指差しながら）この制裁用爆弾――――イーヴィルクリスタルと言ったか。コレの起動キーは彼女の意思だ。つまり――――」

泰子「正解しても気分1つで、と言う事か……」

ユウ「面倒臭え話だな……」

シキ「彼女の性格なら十分やりかねないよ。取り敢えず魔法を使える人は彼女が指を弾く瞬間の防御を頼む」

ユウ「りょーかい」

翔「分かった」

司会専用ルーム――――

エルデ「（待機メンバーとホーク姉妹のいる部屋の様子を見ながら）さて、私達はココから2つの部屋の様子を見物するとしよーか」

ラクス「そうですわね。しかし、正解を知った状態で他の方がクイズに答えるのがこんなにドキドキすると言うのは中々無い体験と思

いません？」

エルデ「確かにそーだなー。あ、チームAの2人――――エルトとファイムがクイズ出題ルームに入った様だ」

ラクス「ファイムさんはどうかは分かりませんが、エルトさんの方は出演なさっている作品の作者さんがガンダムシリーズに造詣の深い方らしいですわね。それがどう活きるか……」

同刻、チームA――――

アデル「御2人共着きましたね。それでは、絵の方を提示させて頂きます。講釈を垂れ流すも良し、即決してテレビジョン的に美味しくない光景を晒すも良し……御好きな様に足掻いて下さいね」

ファイム「無茶苦茶口が悪いですね……」

エルト「コレがとある相手に対しては素直になれずデレにデレ切っていると言うのだから、世の中は分からないな」

アデル「なあッ！？　じ、事実無根な事を言わないで下さい！　私は別にヴィレイサーの事など何とも思ってはいません！」

エルト「ほぉ、僕は別にヴィレイサーとは言っていなかったのだが……」

アデル「し、しまった……私とした事が！」

エルト「しかし、彼の事を『何とも思っていなかった』とはね。勘違いやトラブルが起こっても困るし、この事をヴィレイサーにハッ

キリと伝えておこうか」

アデル「そ、それは困ります！」

エルト「何故困る？　君は彼の事を『何とも思っていない』のだろう？」

アデル「う、うううう……」

ファイム「あ、あの……もうその辺にしておいた方が……。彼女、涙目ですし」

エルト「そうだな。コレ以上やっては収拾が着かなくなりそうだ」

アデル「グスン……うう……スタッフ！」

（布を掛けられた2枚の絵が現れる）

アデル「精々外してお茶の間の良い笑い者になって下さい！　オープン！」

（布が取り払われる）

エルト「むっ……」

ファイム「コレは……」

（ザクを描いた絵が2つ並ぶ）

エルト（どちらも今にも動き出しそうな、躍動感のある絵だな……）

ファイム（Aはフォーメーションを組んで射撃している絵で、Bは敵を無双で斬り捨てている絵……う～ん……）

アデル「もう答えは決まりましたか？　出来るだけ早くお願いしますよ」

エルト「ああ、決まった」

ファイム「僕も決まりました」

アデル「では、回答を一斉にお願いします」

エルト&ファイム「A！」

司会専用ルーム――――

エルデ「ほー、一致かー……」

ラクス「1組目からいきなり見破られたかもしれませんわね……」

エルデ「（スタジオにいるルナマリアのインカムを介して）ルナ」

ルナマリア＜ひ、ひゃい！＞

エルデ「自信満々だったから任せたが、お前本当に大丈夫なんだろーなー？　もし全チーム正解等と言う事態になった場合は、責任を取れるのかー？」

ルナマリア＜（小声で）だだ、大丈夫です！　絶対そんな事にはな

らない様、私も全力で描きましたから！＞

エルデ「なら良いんだ。まー結果次第では覚悟しておけよー（通信を切る）」

スタジオ――――

ルナマリア「三角木馬怖い三角木馬怖い三角木馬怖い……（ガクガクブルブル）」

メイリン「お姉ちゃん、一体何を言われたの……」

翔「ロクな事を言われてねぇのは間違いねぇな。あの2人だし」

心愛「ですね。あの2人ですし」

セレーネ「あの2人なら寧ろまだ評価が高い位じゃないですか？」

リオス「あの2人なら仕方無いかな、うん」

レーネ「まぁ、あの2人だしね」

ソフィア「あの2人だもんねぇ～」

コルト「……こんなに凄まじい勢いで評価が地に落ちる人達も珍しいよね」

ブルズ「だよな……」

ヴィレイサー「帰ったらエルデには注意しとこう……」

シュウ「帰ったらキラさんに……あ、あの人達じゃ無理か」

チームB――――

ブルズ「あのさ、何かあった？」

ケイ「目が赤いですけど……」

アデル「な、何も無いです！　断じて何も無いです！」

ケイ「そんなムキにならなくても……」

ブルズ「取り敢えず一旦落ち着けって。誰も虐めたりしないから」

ケイ「そうですって。何か落ち度があった訳じゃないんだし」

アデル「そ、そうですね……済みません。では、絵の方を出します」

（絵が現れる）

ブルズ「ん……？」

ケイ（ちょっと待て……。コレ……）

ブルズ＆ケイ（どっちだ……？）

ケイ（マズイ……下手だと思ったら予想以上だった……。プロのと殆んど差が無いじゃないか）

ブルズ（落ち着け……絶対差があるハズだ……。何とかそれを見つけろ……）

ケイ（どうしよう……全っ然分からない……。ヤバイぞコレは……）

アデル「御2人共、どちらかは決まりましたか？　決まったのでしたら答えをお願いします」

ブルズ「あ、ああ……」

ケイ「ブルズさん……」

ブルズ「仕方無い……。ケイ、いっせーので同時に言うぞ」

ケイ「……はい」

ブルズ&ケイ「いっせーの……」

ブルズ「A！」

ケイ「B！」

ブルズ&ケイ「え……？」

司会専用ルーム――――

エルデ「ほぉー……」

ラクス「割れましたわね……」

エルデ「こーなるとどっちの意見を採用するか、だが……」

ラクス「エルデさん、どっちの意見が通るか賭けませんか？　一口１００円で」

エルデ「面白そーだなー。良し、なら私はＢに１００００口……」

ラクス「１００００口！？　むぅ……では私はＡに１００００口」

エルデ「良し、なら結果を待つとしよーか」

スタジオ――――

メイリン「ん？」

瑠樹「どうしたんだ？」

メイリン「いえ、何かエルデさんとラクスさんが良からぬ事をやってる気がして……」

怜「ああ……何か分かるわ。当たるか外れるかでギャンブルやってるわね、絶対」

ヴィレイサー「アイツには今度注意しとかないとな……。フラメ程じゃないけどアイツも遊びが激しいから……」

セレーネ「全く困った人ですよね。上司なのにマスターに迷惑を掛けるなんて。何処かのツンデレさんもそうですけど」

チームＢ――――

アデル「くちゅん！　くちゅん！」

ブルズ「どうした？　風邪か？」

アデル「ええ……もしかしたら悪口かもしれませんが。あのポンコツデバイスを後で痛めつけておかないと……」

ケイ「本当に犬猿の仲なんですね……」

アデル「あのポンコツがまるっと悪いんですがね。それで御2人共、答えは決まりましたか？」

ブルズ「悪い。まだ決まってないから、少し時間をくれないか？」

アデル「承知しました。一応忠告ですが、こういう番組では相談＝不正解と言う事が鉄板だと言う事に注意しておいて下さいね」

ケイ「このタイミングでわざわざ言わなくても……」

ブルズ「気にするな。それより、何でBを？」

ケイ「いや、Aは何かザクが活き活きし過ぎてる気がして……。あの人の性格上そんな感じで描きそうですし。ブルズさんはどうしてAを？」

ブルズ「俺的にはあっちの方が『ザク』って感じがしてさ……何て言うか、『無双』してるザクって違和感があり過ぎてさ」

ケイ「確かに違和感はありますけど、意外とあるんですよザクの無

双って。Ｇとの性能差は確かにありますけど、パイロットの技量に因ってはやれなくもないですし」

ブルズ「そんなモンかね……」

ケイ「だから逆に活き活きさせ過ぎてるＡの方が、俺には違和感があるんですよね……」

ブルズ「う～ん……確かにあんまり生き生きとしてるのもなぁ……」

アデル「随分と迷ってらっしゃる様ですが、そろそろお時間です。どちらかを決めて発表なさって下さい」

ケイ「あ、済みません」

ブルズ「じゃあ……ケイ。コレで……」

ケイ「はい、じゃあそれで。せーの……」

ブルズ＆ケイ「Ｂ！」

司会専用ルーム――――

エルデ「良し！」

ラクス「あぁーッ！　'Ｏ　ｓｏｌｅ　ｍｉｏ！（テーブルに突っ伏す）」

エルデ「（ピザを食べながら）何故にイタリア語？　しかしコレ程逡巡するとはなー……。ケイの方に知識が多少なりあるからサクサ

ク進むと思ったんだが……」

ラクス「スイマセン、取り敢えず今日は帰っても良いっスか？　いや、お金はマジちゃんと払うんで」

エルデ「（ピザカウンター：２）いや、仕事をサボろーとするな。と言うかキャラが崩れ過ぎだろーが」

ラクス「ああ済みません、ちょっとショックが大き過ぎて。まあ先程のケイさんに関してぶっちゃけますと、知識があったり良く見たりしてるせいで先入観が入って訳分かんなくなったと言う事かと」

エルデ「（ピザカウンター：３）専門家が雁首揃えても決まらん様なモノかー」

ラクス「そう言う事ですわ。ちょっと回答者の部屋の方を見てみましょう」

Ａの部屋――――

エルト「（モニターでブルズ達が答えるのを見て）ん？」

ファイム「え？」

エルト「コレは……、マズイな……」

ファイム「ケイさんがまさかＢを選ぶとは……」

エルデ＜（ピザカ（メンドクサイので以下ＰＣ）：４）あー、エルトにファイム。何と言うかコレは意外だったなー＞

エルト「ああ、軽くショックだな」

ファイム「いきなり不正解って言われたみたいな感じですからね……。即決せずにもう少し迷った方が良かったとちょっと後悔しています」

ラクス＜そう悲観する事も無いかと思いますわ。あちらが不正解と言う事も有り得る訳ですし＞

エルト「それもそうなんだがな。どうも知識のある人間を相手にしているだけにそう割り切れないんだ」

ラクス＜それは何と無く分かりますわね。私もネット上で御付き合いのある方とあまり詳しくない作品の話になると負けた気になりますから＞

ファイム「いや、それとは違う気がしますけど」

ラクス＜ギルクラとかギルクラとかなのはＧｏＤとか＞

エルト「誰とその話をしてるんだ……」

ラクス＜活動報告でアレの話をされますと、妬ましさと羨ましさの狭間に陥って強だ＞

（爆発音）

エルデ＜済まん、コイツの事は忘れてくれ＞

ファイム「は、はい……」

エルト「そっちも大変な様だな……」

エルデ＜まーなー……そーいう訳だから、（弄りがいが無くなるから）まだ諦めるなよー＞

ファイム「何か黒い声が聞こえた気がしたんですけど」

エルデ＜気にするな。じゃーなー＞

（通信を切る）

ケイ「（隣の部屋の戸を開けて）え！？　２人がいない？」

エルト「見事に分かれたみたいだな」

ブルズ「ええと、２人は何でそっちに？」

ファイム「いえ、編隊を組んでいる方がザクっぽいかなって……」

ケイ「あぁ、やっぱり……それ多分引っ掛けですよ」

エルト「そうなのか？　らしいと思ったんだが」

ブルズ「俺もＡなのかなって思ったけど、ケイの発言を聞いてたら何かＡに違和感を感じてな……」

ケイ「Ａはザクが活き活きし過ぎてるんですよ。何かこう描いた人の愛着って言うかそういうのが乗り移ってる感じなんですよね。兵

器感って言うか、それが欠けてる感じなんですよ」

ファイム「確かにそんな気が……何か自信が無くなって来ました」

ケイ「やっぱりＭＳって兵器ですから、兵器感が薄いのは分かってないなって話なんですよね。そこ行くとＡは兵器って言うよりペットか何かを描いてる感じで兵器感が無いなって」

司会専用ルーム――――

エルデ「（笑いを噛み殺しながら）兵器感」

ラクス（アヤナミ状態）「どういう言葉なんでしょうか……」

エルデ「全っ然分からん。だが……ククッ、兵器感……」

ラクス「あのー……エルデさん？」

エルデ「兵器感……兵器感……ハハハハハ！」

ラクス「……それでは一旦ＣＭでーす」

――

ギンガ「う～ん……」

はやて「どうしたんやギンガ、そんなチキンラーメンの上に乗せた卵が上手く茹で卵にならんかった時みたいな顔して？」

ギンガ「喩えが誰かの実体験臭いですね、八神部隊長。最近と言うか私の出番が少ない気がして悩んでたんです……」

はやて「そんな時はこれや！　『ヤテンスイッチ』に『ヤテンドライバー』！」

ギンガ「スイッチとベルトですか？」

はやて「そや。このベルトを装着してスイッチをセット。それで『セットアップ』って言うたら、次元世界の超パワーを手に出来るんや！」

ギンガ「次元世界の超パワー！？　た、確かにそれを手に出来れば無敵ですね！　でも、やっぱり高いんですよね？」

はやて「心配は要らんよ。そこは安心のはやネットや。今なら全４０種類のスイッチとベルトのセットでたったの５０００円や！　しかも今なら超強力バズーカ『ロッカアースラバスター』と〇ＧＥデバイスを付けた上で、金利手数料から運送費まで全てはやネットが負担するよ！」

ギンガ「ア、アンビリーバボー！」

ep1：「勇者ルナマリアと魔王（ドS）の城」（後書き）

次回に続きます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9735z/

御正月特番「カオス色シンフォニー」

2012年1月1日13時49分発行